第二部（インタビュー・銃後）

福島での戦争体験

佐々木　千代子

（田舎での戦争）

私は福島県の田舎の出身で、戦時中は双葉群という所でお裁縫学校に通いながら平凡に暮らしていました。食べ物でも何でも、そんなに不自由はしませんでした。

ただ配給でバケツいっぱいに、トウモロコシの粉とか、サツマイモの粉とかを貰いまして、お米の代わりにそういうのを食べていた思い出があります。食生活はかろうじて大丈夫でしたけど、都会の人たちは大変だったろうなあと思いますよ。当時はB29が来たって、田舎ですから狙われるものが何にもありません。素通りして行っちゃうんですよ。

家族の中には、戦争には行った者もいますがみな無事に帰って来ました。そういう意味で、戦争の直接の被害はありませんでした。ただ福島県原町の姉の家に行った時にね、ちょうど闇列車（違法に手に入れた物資を運ぶ汽車）というのかしら、それが朝六時に来るからというのでわざわざ見に行った記憶があるんですよ。そうしましたら、ホームに汽車から荷物を全部出されて、頂いてきたお米でもなんでも取り上げられる光景を見ました。そういう時代でしたね。やっと手に入れた食糧を、戻さなくちゃいけないでしょ、かわいそうだなと思いました。

（戦後切符も買えない）

私は終戦の時、二十六才頃かしら、もう六十年以上前ですからすいぶんなりますね。新橋でうちの叔父が、お医者さんを開業していましたので、お裁縫習っているんだったら、こちらにいらっしゃいと言われて東京に出て来たのです。私が東京に来るのに汽車の切符がなかなか買えなかったのですよ、終戦の明くる年の三月なのに東京に行く切符が買えないんです。やっとの思いで買いました。切符も統制されていた時代でした。

港区　レプリカ

第二部（インタビュー・銃後）

授業で敵機の音を聞き分ける

佐々木　美紀子

（頭に残る銃後の歌）

秋田県の大館で育ちまして、終戦の時は十才でした。警戒警報が鳴ると、学校から急遽帰されましたけど空襲はほとんどありませんでした。音楽の授業で和音を聞いて、何の音かを聞き分ける教育を受けました。和音で敵機の音を聞き分ける訓練でした。学校で楽しい唄はありませんでした。小さい時、父が沢山のレコードを買ってくれていたので、家ではよく歌っていましたが、今、思い返すと、殆ど銃後の歌のようなものでした。「勝ち抜くぼくら小国民。天皇陛下のおんために、死ねと教えた父母の、赤い血潮を受け継いで、心に決死の白だすき、かけて、勇んで、突撃だ。」童謡では、「看護婦さん」という大好きな歌がありました。「白いお帽子白い服、いつもやさしい看護婦さん。お国のために傷ついた、兵隊さんを慰める。あなたは尊い女神様」そういう歌です。今でも、この歌は頭の中にありますね。

出征兵士を万歳で見送ったり、千人針もしました。田舎でも、庭に大きな防空壕を作って入りましたよ。防空壕には、大事なものを持ち込みましたね。灯火管制は、光が漏れないように電灯を黒い布で覆いました。家にあった指輪や鍋は、必需品以外は全て金属供出させられました。それはみなさんも同じだと思いますが、その時の情景は、亡き父母の姿とともに今でも鮮明によみがえります。町のシンボルの大橋の鉄の欄干も取り外されて、子供心にも愕然としました。

（戦死した人を思う）

向かいの家のお父さんが出征をして、アッツ島（陸・海軍の北方部隊が玉砕したアリュウシャン列島の島）で玉砕（戦死）して可哀想でした。学徒出陣は、私の周りではありませんでしたが、いつも母が読んでくれる新聞で知って、「特攻隊の人たちはかわいそうだ」と思いました。当時の親御さんたちのお気持ちは、六十年以上経った今でも、心からお気の毒だと思います。原子爆弾投下、ソ連参戦、花岡鉱山の暴動等々、母が読み聞かせてくれた新聞で、十歳の私は、当時のニュースを把握していたことに、今更ながら少し誇りを感じています。

第二部（インタビュー・銃後）

戦時下の女学生

田子　千枝子

（動員で工場へ）

戦争中は生まれてから港区新橋田村町二丁目の自宅でした。父親は炭屋で、私は女子商業学校に行っていました。戦争が本格化してからは、動員で、ガスメーターを作っている工場に行きました。当時は、おばさんみたいな主任さんがいて、あとはみんな女学生でした。普通の女学校の子は、工場で働いて、私たち商業学校は、ソロバン担当で時給六十五銭とかの工賃計算をやって、月に二回の給料を払う仕事でした。空襲になると防空壕へ避難して、月に二回か三回は徹夜になることがありました。家に電話をかけて、「今夜帰れないよ」って言うと父親が少したって折り返し電話をしてきました。空襲警報が鳴るでしょう、生きているかどうかを、確かめるための電話がくるんですよ。そして、次の日も続けて働く、そういうことが、月に二回はありました。大崎で明電舎とか、小さい工場がずっとあって、いろんな所に皆が行っていました。雪がすごく降った時に、空襲で電車が全部止まって帰れなくなって、歩いて帰れって言われて、道は分からないし、一緒に働いていた男の子が新橋まで送ってくれたことがありました。自分は神田だからと言って、神田へ帰ったのですが、自分の家も焼けてなくなり、誰もいないって、今度は私の家に泣きついてきました。私はその子の名前も知らず話をしたこともない子でしたが、神田司町の炭屋の家で。私の親も知っていたので、しばらく家にいましたよ。食べさかり六人も抱えているのに、よその子を、よくうちの父親がみたと思って。

（新橋の空襲）

新橋は昔は静かでいい所でしたよ、芸者さんがいてね。赤レンガ通り、烏森神社からずっと夜店が一の日と十一の日、五の日、あすこらへんずっと縁日の夜店が続いていましたね。空襲で、私の実家の後ろから全部ずっと焼けて、トンネルが見えたくらいです。私が目覚めたときは裏の家がないの。そしたら家の人が、私を起こすのを忘れたんだって、焼夷弾が家の屋根にも落っこって、父親も、妹たちも、弟もみんなバケツリレーで消していたんだって。私が目覚めた時にはないの（笑）。もうずっと、焼けちゃっていたの、私は忙しい工場で働いていたでしょう、ぐっすり寝ていたのね。

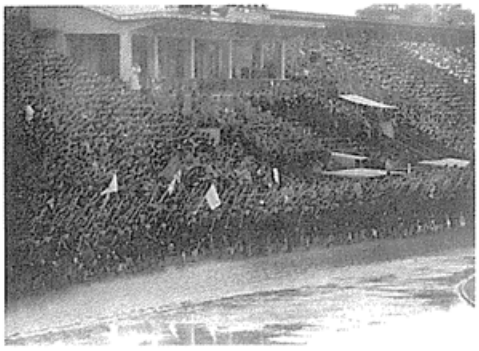
（学校も戦争協力）

私は六人兄弟がいて、親と八人。妹は宝塚劇場で。父たち

が動員されて、椅子などを片付けて工場にしたらしいです。日劇も同様でした。風船爆弾を作るために、こんにゃくのりで風船を貼る仕事をしていました。妹の女学校は、麹町にあって普通科でしたけど、学校に行かなかったですね。ある日、あの辺が、空襲でやられました。宝塚があって、電車通り寄りに、水交社（海軍の高級士官の社交場）があり、爆弾が落とされて、海軍さんがずいぶん亡くなりました。後で妹に聞いたら、階段、地下にみんな逃げるでしょう、遅れた子は、背中に硝子やなんかの破片を浴びたって言っていました。

（学徒出陣）

私は子供だったから、事情は分からないんですけど。家の倉庫を改造して、事務所に貸していたところへ、バイトで大学生が働きに来ていました。その人たちが、学徒出陣でみんな兵隊に行ってしまいました。神宮外苑での壮行会に、私たちも行きました。すごい寒い日で、雨が降っていて、びしょびしょで、あの人たちかわいそうと思うよりも、私自身が寒くて、寒くて。早く終わればなと思いました。よくテレビで当時の模様が映ると、ああ、あの中に私がいるんだなと思います。私の家にバイトに来ていた人は、厚木の航空基地の部隊だったの。だから、次から次と海軍さんを家に連れてくるの（笑）。そうしたら、妹が予備学生ばっかりで面白くないというわけ。兵学校連れてこいといったら、兵学校の七十二期の人を連れてきたの。二回来たのかな、その人が厚木へ帰るんで、渋谷の地下鉄の駅に二人で送って行ったのよ、そして〝さよなら〟って送ったらね、私に写真をくれるっていったのを、貰わなかったです。戦闘帽で白いマフラーだったの、こんなんじゃダメだ、いらないって断ったの。その人は訓練飛行で、高圧線にひっかかって死んだの。もらっておけばよかったなと後悔しました。



学徒動員雨の中の壮行会／毎日新聞

第二部（インタビュー・銃後）

青春真っ盛りの戦争

田村　恵美

（東京へお手伝いとして）

私は北海道で生まれ育って、昔でしたので東京の杉並のお宅にお手伝いさんとして勤めました。青春の真っ盛りの十七才くらいの時です。そこのお宅で大東亜戦争が始まりました。でも私は恵まれていましてね、最初にお勤めしたお家の旦那さんは、産婦人科のお医者さんで、勤務医さんで、奥さんは、日本女子大の英文科を出た方でした。私、今でも感謝しているのですが、あの頃で言うと女中さんでしょう。それでも、毎月一日はちゃんと、「今日はお休みやるから、どこへでも行ってきたら」とか「私小学校しか出ていない」と言いましたら、「中学行きたかったら、夜間行かせるから行きなさい」って言ってくれました。でも「私、勉強大嫌い」って（笑）。阿佐ヶ谷に映画館があり「今日は、面白い映画をやっているから、いってらっしゃい」って出してくれると、帰りにはちゃんと旦那さんが迎えに来て下さる。そういう家で私は教育されたんです。差別しないですよね。たとえ主人の家の子に対しても悪いことは悪いと、遠慮しないでしかってくれと言ってくれました。何でも聞けば教えて下さる、本当に大切にして下さいました。だからこそ私は忘れられないのです。いい教育をしてもらったな、幸せだったと思いますよ。親たちが満州へ行くことになり、茨城に年寄り二人になってしまうので心配だから帰ることになりました。「帰したくない」って奥さんに言われましたけどね。その後旦那さんが戦死した時、手紙が来て、「体があいていたらお葬式を手伝いに来て」って言われて行きました。今でも本当に感謝しています。

（茨城での戦争）

親は農家でしたけど、辞めて満州へ開拓団で行きまして、お爺さんとお婆さんが茨城に残りました。祖父母と私だけだったので、食糧は苦労しました。私は、軍需工場で働いて、三人で暮らしていましたけど、空襲で東京が燃えて、夜の空が真っ赤だったことを憶えています。

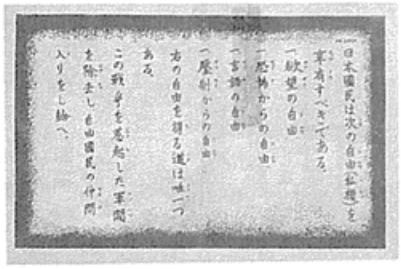
すぐ下の弟は、義勇軍として内原訓練所で教育を受けまして、満蒙国境へ行き終戦後四年間シベリアに抑留され、それでも生きて帰って来ました。両親は終戦後二年経って帰国しました。

（焦土の中を）

父親たちが帰って来てから、縁があり麻布にいた夫と結婚

しました。是非にもって言われて、何にも知らないで結婚したのです。「お母さんバカだね、自分の亭主の顔もよく分からないで嫁に来た」って、家の子供に言われました(笑)。当時は焼け野原でね。瓦礫ばっかりでした。今、高速道路が通ってますでしょう、あの辺にいたのです。食べ物と言ったら、水のようなお粥ですよね。すいとんでも、まともに食べられればいい方だったですよ。終戦になってから、広島で、原爆にあった兵隊さんが帰って来る姿を見ました。体の見えているところが、全部焼けて、ぐじゃぐじゃになっていました。そういう人を、何人か見ましたね。本当に気の毒だと思いました。

昭和館


昭和館

第二部（インタビュー・銃後）

新婚時代の白金の空襲

遠山　フユ

（北里病院付近の空襲）

私は、昭和十八年に新潟から、朝日中学校の前のあたりにお嫁に来ました。空襲で家の前にアメリカが爆弾を、ボンボンボンボンと落としていったんですよね。正門の前に木が二、三本植えてあって、そこに防空壕を隣組で掘りました。防空壕の中に荷物を入れて、ほとんど、そこで暮らしていました。でも、近所で防空壕の中に荷物を全部入れていて、焼かれてしまった人もおりました。防空壕の中は、ほんとに暗かったです。雨が降るとじめじめしていました。空襲は大変でしたよ。北里の新しい病院の辺りは、普通の家がずっと建っていたんですよ。でも、病院があるのでそれを守るために、周りを全部壊さないといけないと、建物疎開でね。壊すにしても男手が無いから防空婦人会、国防婦人会とかの女性たちで、ロープを柱にゆわえて五、六人でよいしょ、よいしょと引っ張って壊したんですよ。壊し終わったら終戦になってしまいましたけど（笑）。

防空壕は、敵の飛行機が来た時だけ入る人もいましたけど、

私たちは生活の場でしたね。すぐ近くで床屋さんが、防空壕の真ん中へ焼夷弾が落ちて家財全部焼けたんですよ。とにかく焼夷弾がすごかったです。竹槍を持って稽古もしました。空襲で焼けた時に、水をかけるバケツリレー等、生活はとにかく苦労の連続でした。

（苦労した食生活）

一番苦労したのは、食べるものでしょうね。サツマイモを買い出しに行くのは、大変でしたもの。今の池袋から、電車に乗って行くんです。それでサツマイモを、四十キロくらい背負って帰って来るんです。もう、窓のガラスなんかないですよ、皆は窓から出入りしていました。あの時はサツマイモ、大根のご飯ね、サツマイモのつる、色々な物を食べましたものね。それから大豆を潰したのをご飯に入れてね。今はトウモロコシの粉はおいしいけど、あの時はおいしくなかった。でも、おいしいとかまずいとかは言っていられなかったですよ。それと木の箱の両端に鉄板を敷いて、電気を通してパン焼き器を作り食べました。まあまあ、戦時中のことは大変でしたよ。

（夫の出征）

夫はお嫁に来て一週間経つか経たないうちに、召集で兵隊に行ったんですよね。それで、帰って来たのは、昭和二十三年の夏でした。日本へ帰るからって千島へ回って、船が横向いてソ連へ連れて行かれたんです。それで、海から山へ登って、塩を運んだって言っていました。腕時計は食べ物と取り替え、金歯まで外して黒パンと取り換えて食べたって言っていました。そんなわけで、帰って来たときは、栄養失調で顔はふくらんですごかったですよ。

（若い方へのメッセージ）

昔は、お饅頭一つあれば、食べませんかと言って、皆さんに配ったけれど、今はそういうことをしなくなりましたね。今の若い人は、挨拶もしない、そんな時代になってしまいました。

毎日新聞

第二部（インタビュー・銃後）

戦時下の炭鉱、そして戦後

西宮　玉和

（軍需工場での思い出）

徴用になるといけないって、大田区池上の中島飛行機という会社の下請けで、飛行機の部品を作る会社に勤めました。十八才くらいの時で、旋盤担当でしたが全く経験がない状態でした。また鋳物工場では一人前の人を川口のほうからわざわざ連れて来て部品作りをやらせていました。一年くらいして、北海道の夕張に近い炭鉱に徴用されました。北海道に行くことが決まった時は、父と母が、ずいぶん残念だとか思っていたらしいです。ですから、東京での空襲の経験はありません。私が北海道に行った明くる日ぐらいから、空襲がだんだん激しくなってきまして私の卒業した御田小学校も被災したのです。

（炭鉱での思い出）

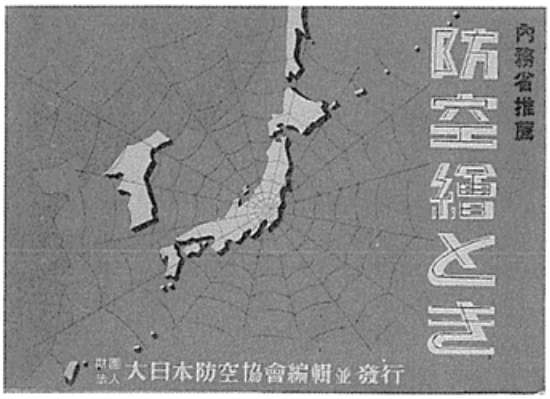
北海道は、あまり爆撃機が来ないですから、怖い思いはありません。夕張の近くの炭鉱でしたが、日本人は楽な方に回してくれました。一人で、六人くらいを使って仕事をしていました。でも、毎日のように死人が出るんですよ。韓国の人だとかね。ほとんどが韓国人で、強制労働みたいなものでした。危険な場所へ、危険な場所へと行かせたわけですよ。私も火災に遭いました。奥の方での火災でしたので、助かりましたけど、爆発だったら命がなかったでしょうね。夜やなんか時々ね、嫌になって、どうしても行きたくない時は、韓国の友達と、お茶を入れて飲んでいました。いろんなご馳走をしてくれて、とても親切にしてくれましたよ。

（戦後の思い出）

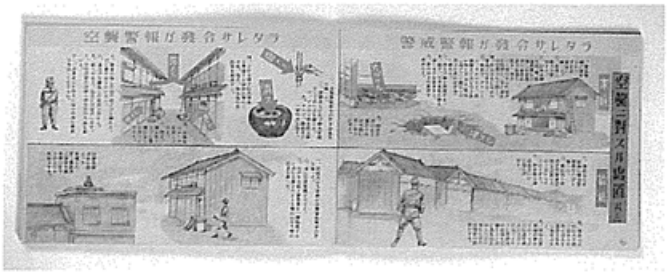
韓国の人たちは、今に、日本は負けるって言っていましたね。ある日一番先に穴から出てきたら、友だちがいてね、「おい。日本は負けたぞ。これから、日本人はどうなるか分からないぞ」って言いました。終戦から東京に帰るまで、二ヶ月かかりました。切符が買えなかったからです。小学校一年の、夏休みに過ごした親戚の家に、懐かしくて寄ってから帰って来ました。

戦後は、食べ物がなくってね。白金から、上福岡の農家まで、買い出しに行きました。買い出すにはみんなに黙って、違う所に行っていましたね。上福岡に行けば必ず、仲の良くなった人が、太白（たいはく）という白いお芋を分けてくれました。そして、ズタ袋みたいのを担いで池袋まで行って、

帰って来てからふかして食べたりなんかしていました。五、六年は、食べることに困っていたと思います。



昭和館



昭和館

第二部（インタビュー・銃後）

親の必死の思い千人針

長谷川　宣子

（群馬県桐生での戦争）

私の田舎は、群馬県の桐生市です。私が一番下の子で、父親は高齢で兵隊には行きませんでしたが、二人の兄が戦地に行きました。

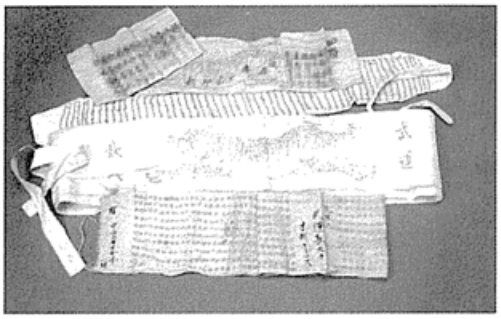
前橋の空襲は激しかったようですが、桐生はあまり空襲はありませんでした。食べる物は皆さんと同じで、不自由でしたね。食べる物は、どこにもありませんでしたけど他の家の子供が来たら、何か食べさせてあげるとかの優しさがあの時代にはありました。実家は、終戦後までずっとはたや（織物屋）をやっておりました。桐生は、織物の町でしたし、家の商売が着る物でしたから、汚い物は着ていませんで、石鹸がなくてもちゃんと洗濯はしていました。

（戦時下の女学校時代）

飛行機の音がすると、作った防空壕に入りましたが、飛行機は高くて見えなかったですね。朝、防空頭巾を肩に振り掛けて、救急袋を持って、学校に行って、「はい、あなたはこっ

ちの畑、貴方はこっちの畑」と指示されるわけです。後は慰問袋を作ったりしました。私は兄弟二人が兵隊に行きましたから、千人針も作りました。千人針は、親の必死の気持ちですよね。千人の魂を一針一針縫いこんだ布を、お腹に巻いたりして、お守りにしたのですけど、子供が生きて帰れると思う親の願いですよね。兵隊に行く時は、隣近所、親戚も呼んで結婚式じゃないけどごちそう作ってお祝いですね。死ぬために戦地に行くのにお祝いだからね。当日は近所の人が来て、万歳、万歳って送り出しました。上の兄が行った時は、近所にも内緒でした。召集令状が来ても騒ぎも何もしませんでした。兄は自分の荷物一つを持って、兄弟一人ぐらいが送って、高崎に行きました。兄の子どもが生まれてすぐ、子どもが一才の時です。それで、最後の面会もしないで外地（海外派兵）に行きました。私の兄は運よく帰って来ましたけど、そのまま、戦死した人は気の毒ですよね。兄は六年間兵隊に行きまして、終戦後二年で南方から帰って来ました。もう子どもは小学校一年生になっていました。帰って来て、子供に十円くれと言われた時、兄は腰を抜かすほどビックリしたそうです。行く頃のお金は一銭の単位ですものね。六年間兄がいない間は、父母が子どもの親がわりでした。

下の兄が行った時は、ずいぶん面会に通いましたよ。今会わないと最後だ、今度が最後だって、面会に行きました。な



千人針／昭和館

い米で餅を作ったり、おはぎを作ったりして持って行きました。一つ笑い話があります。知っている人が、息子はおはぎが好きだからって、持って行って見つかると怒られる。それで、着物の懐におはぎをいっぱい入れて、偉い人が来てお辞儀をしたら懐から落ちてしまった（笑）。でも上の人は見ない振りをし、親の気持ちを察して拾ってあげ再び懐へ入れてくれたって言っていました。そういう時代だったのね。

（平和への思い）

だけど、これから生きる孫たちには、あんな思いはさせたくないね。戦争だけは絶対にないように思います。

第二部（インタビュー・銃後）

田舎暮しで恵まれた戦前・戦後

匿名希望

（栃木県での戦争体験）

私は、戦時下を栃木県の田舎で過ごしました。父が事業を営んでおりましたので、戦争の苦労は、比較的ありませんでした。父の仕事は中島飛行機にも関係がありましたので、徴用（戦時下の勤労動員）はされませんでした。

田舎の町でしたけど、二度ばかり空爆がありました。小さな町ゆえ、みな、山や田畑に落ちて人的被害はありませんでした。校庭には兵隊さんたちが拾い集めて来た爆弾が山と積まれておりました。防空壕に入りながら照明弾の落ちるのを恐ろしさと同じくらい、とてもきれいだと思いました。

戦時中には、農家のお手伝いで、稲刈り等の作業や山の開墾が辛かった覚えがあります。作業中に、当時兵隊さんが田舎にも来ていまして、匍匐前進（武器を持って、腹ばいになって地べたを進む）をいばらの上でびしびしぶたれながらしていました。それを見ていた主婦たちは、戦争に行っている自分の家族のことを思って、戦争の大変さを話しておりました。

終戦の何か月か前の出来事ですが、当時学校では朝礼の時、皇居（宮城と言っていました）に向かって黙とうをさせられておりました。ある夜、その方向の夜空が真赤になって近所の人たちは大騒ぎでした。

とても可哀想な話ですが、東京からお米の買い出しに来て何も買えず歩きまわっていて、栄養失調と空腹でまだハイハイしか出来ない赤ちゃんをおんぶした若いきれいな母親がリヤカーに乗せられて遠くの農家の方に連れて来られました。お医者様も見えたりで、我家でしばらく栄養と休養をとっておりました。年寄りがお世話をし、私は可愛い赤ちゃんをお守りしたりで元気になられ、もうしばらく居なさいとの言葉に、長く居過ぎてはと遠慮されたのでしょう親にもこんなに大事にされたことはないと、泣きながら帰って行かれました。私もバス乗り場までお見送りしましたが、その夜空をこがしたのは二日後のことで、その方は我家に礼状も出さぬまま焼死したらしいのです。母は礼状も書かない人ではないとのことで、何日もシンミリしておりました。後でわかったことですが、その方の住所のあたりは全滅だったそうです。

お世話していた人が何を食べても何かしら食べられるから、いざとなったら来たら良いと話したそうで、とても喜んでいたそうです。内緒話だったけれど言ってあげて良かったとの

ことでした。物置の大きな漬物桶を見てビックリしていて、季節も移りかけ、味もまずくなっていた頃ですのに、漬物でも何でも食べられる物は持てるだけ持って帰られました。私の母は、赤ちゃんのために（一才年上の子どもがいたために、人ごととは思えず）元気にならなければと栄養栄養と一生懸命でしたので、また、戦地にいられる御主人が帰国されたらどんな思いでしょうと泣いておりました。私たちは情が移っておりましたから、しばらくは、もしかしたらと思っておりましたがそれまでででした。

終戦の時は、小学校六年生で夏休み中でしたけど、皆学校に集められました。あまり理解できずに家に帰る途中、友達と「天皇陛下が出て来てのお話ですもの日本が絶対勝つわよ」と話しておりました。先生が涙していらしたのはあまりにも有難くて勿体（もったい）ないからと思い私も満足でした。家に帰って、初めて負けたことを知りました。

戦後は外地からの引き揚げや、戦災にあったりの親戚のために我家も大変でした。従姉妹の子どもは太鼓の様な大きなお腹で満腹であるにもかかわらず、見える物は全部自分一人で食べようとして私達を食べ物から遠ざけたりで可哀想でした。

戦後、両親は敗戦の他にも大変な時代になりました。正確には言葉をのみこめませんが、不在地主とか、農地開放とか、新円切替とか、封鎖とか、そんな言葉でどれも我家では大変だったらしく、母は病気になり一年近く寝たり起きたりでした。お医者様は神経衰弱と言っておられました。

私の場合は幸い戦前戦後を通じ苦労はしませんでした。わずかな年の違いで子どもの世界にいられたからです。

小島　義一　画

第二部（インタビュー・銃後）

ザリガニ・イナゴはご馳走

福田　旺子

（いつも皇居に拝礼）

戦時下の食糧不足は、両親や姉が買い出しで手当をしてくれました。私も姉と埼玉県小川へサツマイモをリュック一杯買い出しに行ったそうです。小学校は荒川の第三峡田国民学校で、学童疎開には行きませんでした。私が結核の治療のために、白金の北里研究所に通っていましたので、学校にもあまり行けなかったからです。荒川から白金に都電で行きましたが、馬場先門を通る時、皇居の方向に車掌さんの発声で、いつも拝まされました。兄は銀行員だったけど、度の強い近視でしたので外地には出されず、立川の高射砲部隊にいました。

（東京大空襲後歩いて疎開）

逃げる時は空が真っ赤で、B29が悪魔の鳥のように、低空で飛んでいました。その時のことは、未だに何かの拍子で夢を見ます。父の判断で、常磐線の外側の方に逃げました。荒川区役所の方は、常磐線の高架土手が火をさえぎって焼けなかったので、荒川区役所に何日間か避難していました。防空ずきんとランドセル姿で、わら草履を履いて父、姉、妹と逃げました（※注一）。わら草履がすぐに破れて苦労しました。空襲後何日か経って、家の焼け跡に行きました。焼けて何も残っていませんでした。ただ、ひな祭りのおひな様の、首頭だけが残っていて、その顔の白さは特に印象に残っています。防空壕に蓄えていた二俵分（たわら二つ）の桜炭が、美しく燃えていましたよ。荒川区三河島から、埼玉県の三輪野江村、現在の吉川町まで歩いて、縁故疎開をしました。浅草を抜け、江戸川沿いを行くまでに、炭化した焼死体を三体ぐらい見ました。三輪野江の小学校の教室で疎開してきた理由を話す時、級友にこの話をしたことを覚えています。

（疎開先でザリガニもご馳走）

疎開をしても食べ物は、あまりありませんでした。田舎の子供たちはおやつに、大きなおにぎりを食べていましたけど、自分たちは食べられませんでしたね。当時の田舎の子は裸足で通学していましたので、私も裸足で通学しました。始めはきつかったですよ。でもこの経験が身体を鍛えてくれたのだと感謝しています。疎開先の家が、地元の村長の家だったの

で、あまりいじめはなかったです。私は、先生から借りた本を学校で読んだり、姉が買ってきてくれた木琴をたたいて遊んだりしていました。ザリガニ釣りは、田舎の学友とやりましたね。カエルを餌にザリガニを釣って、ゆでて食べました。重要なタンパク源だったと思いますよ。当時、お米の代わりに配給になった砂糖で、カルメ焼きを作りましたけど、上手く作れませんでしたね。その頃常食にしていたのは、細かく切ったジャガイモとお米を炊いた主食と、副食は切り昆布の煮もの、お弁当は、梅干し一つの日の丸弁当でした。イナゴも食べましたよ。手ぬぐいで袋を作って、竹の筒を袋の口にして、イナゴを手で捕まえて竹筒の口から袋に入れました。学校全体で、競争して取りました。取ったイナゴを学校側が売って、学校運営に使っていたのではないでしょうか。また、縄ない競争などもやりましたけど、田舎の子の方が上手でしたね。田舎の男の子は、夏になると、大きな用水のところで水浴びをしていました。江戸川で泳ぐと、深みにはまって亡くなる子が、夏ごとに一人ぐらいましたよ。

田舎にも爆撃機が来て、機銃掃射を行った時は怖かったです。B29の搭乗員が、落下傘で近くに降りて来て、捕虜になったこともありました。小学校の校長先生が、朝礼の時、朝礼台に捕虜を立たせて演説の内容は覚えていませんが、訓示をしたことを記憶しています。

学校の給食の脱脂粉乳は、飲めなかったですね。そのためか、今も乳製品は苦手です。虱（しらみ）がたかったので、校庭で頭からＤＤＴをかけられました。頭の中の虱（しらみ）は、櫛ですいても、髪の毛の一本一本に卵が残るので、取れませんでしたね。

（袋貼りは今でも自信）

疎開先の家にラジオが無かったので、玉音放送は聞いていませんね。夏休みで学校にも行っていなかったし、九才だったので特に印象はありません。戦後、昭和二十六年に東京に戻りました。東京は、もう落ち着いていたと思います。東京に戻ってからは、食糧難ということはなかったですね。住宅難ではあったと思いますけど。ジャム付コッペパンはよく食べました。板橋の叔母のところから新制高校に通い、袋貼りの内職で叔母を手伝いました。袋貼りは、今でも上手だと思いますよ。

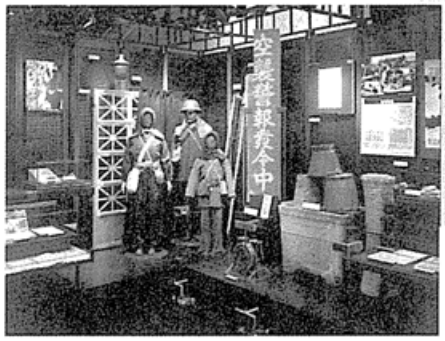
（若い方へのメッセージ・平和への思い）

戦争は殺しあいです。良い戦争などありません。勉強したくても、出来ず若い人たちが死んでいきました。殺されたの

です。今の世は戦争で死んでいった人たち（軍人・民間人を問わず）の悲劇を土台に成り立っているのです。このことを忘れず、世界から戦争がなくなるように、まず、自分の国の平和を守ること、みんなで手を組みましょう。

注一、なわ跳びの遊びが流行っていて、下駄よりもわら草履の方が跳び易かったため。

昭和館



昭和館

第二部（インタビュー・銃後）

戦時下、戦後の学生生活

匿名希望

（疎開の思い出）

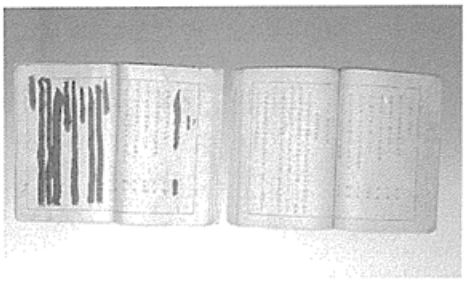
長野の疎開の思い出は、学校の校庭が全部畑になったことです。サツマイモや何かを作りましたが、夜に盗みに来る人がいて、生徒が交代で不寝番（見張り）をやらされたんです。それから思い出すのは、中学の時の夏休みの宿題が干草一貫目を持ってこいと言うのがあり、びっくりしました。干草一貫目作るのは大変なことでしたが持って行きましたよ。しばらくしてから先生が、一握りのビスケットをくれました。もちろん干草だけじゃなく何かが混じっていたと思うんですけど、黒茶色をしてバサバサして、時には砂が混じっていました。みんなの持ってきた物でこういうものが出来たんだって、先生が言っていましたね。毎日お腹が空いて、どうしようもない時代でしたからね。

（戦後のお話）

玉音放送は農家の庭で聞きました。聞き取りにくくて、意味がよく分かりませんでした。大人の中にも、これはもっと

戦えって意味だと言っている人もいたくらいです。夏休みが終わり、学校に行きましたら、厳しかった先生の態度が一変して優しくなり、民主主義だって言うものですからちょっと戸惑いましたね。

私は、昭和二十三年、大学に入学するために東京に出て来ました。東京にはまだ闇市がありましたし、上野では戦争で親を亡くし、行くところのない子どもたちがタムロしているのを捕まえて、トラックに乗せて行く戦災孤児狩りも行われていましたね。下宿は四つ木で、三畳間に長野の友達と二人の暮らしでした。下宿のおじさんが、ドブロク（密造酒）を作っていたり、少し行くとまだ田んぼがあったり、まだまだ物資がない時代でしたけど、やっと空襲がない時代になったわけです。



戦後スミで消した教科書／昭和館

第二部（インタビュー・銃後）

焼け跡は焼き畑農業

宮崎　一二

（子供時代の戦争の記憶）

東京大空襲三回目最後が五月二十四、二十五日の港区の大空襲でした。空襲警報の音で夜中におこされて芝公園に母、赤子の妹と逃げました。ほとんどの生徒が当時、疎開に行っていましたが、同じ死ぬのなら親と一緒がよいと疎開はしていませんでした。記憶しているのは、サイレンが鳴って、父の指示で芝公園に逃げて命を助けられました。

（子供時代の戦後の記憶）

玉音放送はみんなで聞いたのですが、記憶にはないですね。まだ子どもでしたのであまり、関心を示してなかったと思います。父は士官学校を病気で中退して軍人になれませんでしたが負戦を知っていたかのように普段と変わりませんでした。両親は戦中戦後の毎日の食料を手に入れる生活が大変だったと記憶しています。

戦後の生活の方が鮮明に覚えています。飯倉小学校の跡地に、バラックを建てて住みました。焼け跡は、焼き畑農業の

様なもので、何でも良く育ちました。サツマイモも、茎まで食べましたね。買い出し、新橋の闇市で生活しました。戦災あとは増上寺の鐘、船の汽笛等が聞こえる静けさを、断片的ですが、思い出します。戦前の長屋の路地、戦災の後地は格好の子どもたちの遊び場でした思い出が思いおこされます。

毎日新聞

第二部（インタビュー・銃後）

戦時下の青春

匿名希望

娘時代が信州の長野であの頃は学徒動員で大変だったんです。女子挺身隊として工場で働きました。善光寺のそばの旅館で皆が泊り込みをして、長瀬と言う所にある工場まで四十分かけて歩いて通っていました。工場では、わけも分からないのに、細かい仕事でハンダづけをするなど一生懸命でした。夜は膝の上で本を開いて読んだり、数学をやったり、そんな程度ですね。十七才くらいの頃で、田舎でしたし戦争をじかに経験してないから、戦争の厳しさは、あまりわからなかったですね。

そのうちに終戦になって万歳となりました。兄は兵隊でシベリアで残りました。二番目の兄は、国内で終戦を迎えましたので、早めに軍隊から帰ってきました。上の兄は昭和二十三年頃に帰国しました。終戦後は、新町の学校に戻りまして、卒業しました。昔の話ですけどね、戦後はにぎやかに演芸会もあればお祭りも盛んでした。兄たちが三人いますから青年団とかの行事も沢山ありまして、皆で楽しかったですよ。

第二部（インタビュー・銃後）

悲しかった兄の戦死

山碕　田鶴子

（勤労奉仕）

地方の三重出身ですから、あまり東京の方のような苦労は、していないかもしれません。

勤労奉仕と言いまして、稲刈りから田植え、麦踏みなど、お百姓さんのすることは全部しました。皆が嫌がらずに行ったのは、農家へ行って、お手伝いをすると白いご飯をごちそうしてくれてそれが唯一の楽しみというか、それがあったから、一生懸命やったんだと思います。まあね、楽しみといったらそんなところだったと思いますよ。他に楽しみと言えば勤労奉仕で行く時は、二、三人で一軒の家に行くんですね。その休憩時間に、私に歌を歌えって言って「愛国の花」だとかを、アカペラで畑だとかそういう所で歌うぐらいでしたね。

その頃は、それほど押し迫っていませんでしたから。女学校三年生ぐらいまでは、学校でいろいろな材料を煮込んだ、雑炊は食べられましたけど、十七才の終戦近くになりますと、鈴鹿に海軍工廠（こうしょう）というのがあり、そこへみんな動員で行かされました。私は配属された軍需工場で、会計などの事務系をやっていました。仕事の時は、町育ちということで、上役の方たちとうまくいくのですが、宿舎に帰って来ると、食べ物を持っている農家の子にいじめられるという悲しい思いをしました。農家の方は皆さん、いろいろなご馳走を持ってきて羽振りがよかったんですよ。でもね、私、ちょっと風邪をこじらせて肺炎という診断書をもらって、自宅に帰りました。いじめも嫌だったものですから、帰っちゃったんです。

（兄の思い出）

私の一番悲しかったことは、一番上の兄が、戦死したことです。補充兵でしたから、もう、三十才を過ぎていました。兄は、東京の出版社で働いていました。当時は、出版社に行っているというだけで、アカ（左翼思想の持ち主）だと言われました。警察がいつも、素行調査のために家に来ていました。その後、中国で戦死しましたけど、郷土の部隊でしたから、遺品を全部郷里へ送り返してくれました。兄は、将来小説家になろうという気持ちの人でしたので、戦死する日までの日記をつけていました。軍隊というのは、上に厚くて下に薄い所だと批判的なことも書いてありました。よく検閲の厳

しい軍隊から戻って来たものだと当時はびっくりしていました。終戦後、生還された戦友のご近所の方の計らいだったのです。血染めの手帳を見て、認めたくなかった兄の戦死を実感しました。

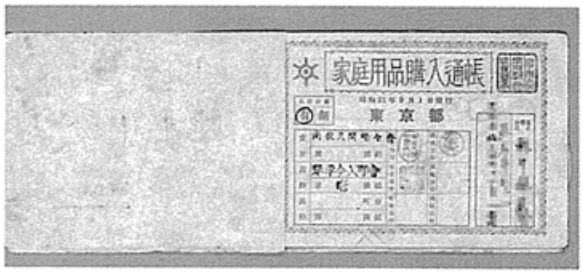
（戦時中の暮らし）

戦争中は、お大根でもこのくらいずつ（十センチも無いくらいでした。）切って配給されたんですよ。それから、警防団とかそういう人たちが、ものすごく威張りちらしてね、ちょっとでも明かりが見えていたら、家に入ってきてドンドンと机を叩いて、「今何時と心得るか」なんて言ってどなるんですよ。妹が少し間をおいて、「非常時です」なんて言ったことを覚えています。今になれば笑い話ですけどね。

（戦後の暮らし）

戦後は、一番怖かったのはおまわりさんです。買い出しに行くときに、没収されるのが怖かったですね。また、お米を買い出しに行く時、お百姓さんが漆器だとかを持って来いと言うものですから、家にある会席膳などが、全部無くなるほど物々交換した時代でした。

家庭用塩購入券



家庭用品購入通帳